旅の見どころ 1

海士（あまし）の素もぐり漁

秋、佐田岬半島で、江戸時代から続くと言われる伝統の素もぐり漁が佳境を迎えます。「海士（あまし）」と呼ばれる男たちが、カキダシという漁具を手にサザエやアワビ、ウニを狙います。風が強く、潮の流れも速い岬周辺の海は、秋は荒れる日が増え危険を伴います。しかしその風や潮が海底をかきまぜ、プランクトンや海藻がよく育つ豊かな漁場を作っています。海士歴２８年の山下孝文さんは、上手風の吹く海で、仲間と助けあい漁を続けています。

長さ５０キロ、一方で幅は狭いところで８００メートルほど。急斜面が続く愛媛県佐田岬半島。
秋は上手風（うわてかぜ）と呼ばれる北西の風が吹きつけます。防風垣を大切に手入れし、斜面で柑橘（かんきつ）類を育てる農家。潮流も速い海で、風を読み、時に助け合いサザエやアワビを素もぐりで狙う男の海士（あまし）たち。今年度で閉校する小学校では、風の俳句を詠む子どもたち。そして岬には、ヒヨドリの大群が舞う。風とともにある暮らしを訪ねる旅です。

旅の見どころ 2

防風垣の手入れ

清見（きよみ）やデコポン、サンフルーツなど、柑橘栽培が盛んな佐田岬半島。上手風が直接吹きつける段々畑では、３００軒以上ある柑橘農家が、果実を守る防風垣の手入れに追われます。緑の壁のように立ち並ぶ防風垣は、太陽の光を遮らない高さ、強風に耐えられる厚みを残して刈り込みます。柑橘農家の３代目、梶原孝一さんの畑の防風垣は、総延長４キロ以上。手入れは１カ月近くかかりますが、枯れては植え直し大切に守り続けています。

旅の見どころ 3

ヒヨドリの渡り

半島の先端にある佐田岬灯台で、地元の人々にシの足音を告げるヒヨドリの渡り。対岸の大分県までは豊予海峡を挟んで１４キロ。灯台付近は南へ渡る鳥たちの絶好の休息地となっています。北から、次々と集まるヒヨドリの群れ。上空からは、天敵のタカやハヤブサが狙っています。敵の攻撃を避けるため、海面ギリギリを飛び１４キロの旅に出るヒヨドリ。多い年には１日５万羽、佐田岬の晩秋の風物詩です。

小さな旅

～こころのふるさとをみつめて～

コブック　vol. １２１

上手風（うわてかぜ）吹くころ
～愛媛県　佐田岬半島～

2013年１１月２４日（日）放送

小さな旅　ホームページ
http://nhk.jp/kotabi

memo

アクセス方法

＜電車・バス＞
ＪＲ予讃線（特急）「松山駅」→「八幡浜駅」（約４６分）
→三崎港行きの定期バスで約６５分（１日３往復）

＜車＞
松山自動車道
松山ＩＣ→八幡浜ＩＣ→国道１９７号線（約２時間）

※半島内の公共交通機関はバスのみで、便数も限られているため、レンタカーが便利です。